

汉字研究新视野丛书

SHUOWEN HANZI TIXI YANJIUFA

说文

汉字体系研究法

宋永培 著

广西教育出版社



本丛书获第三届国家图书奖提名奖
本丛书列入国家“九五”重点图书出版规划

汉字研究新视野丛书

臧克和 主编

《说文》汉字体系研究法

宋永培 著
广西教育出版社

汉字研究新视野丛书
《说文》汉字体系研究法

宋永培 著

☆

广西教育出版社出版

南宁市鲤湾路8号

邮政编码:530022 电话:5850219

本社网址 <http://www.gep.com.cn>

读者电子信箱 master@gep.com.cn

全国新华书店经销 广西民族印刷厂印刷

*

开本 850×1168 1/32 11.75 印张 264 千字

1999年8月第1版 1999年8月第1次印刷

印数:1-2000册

ISBN 7-5435-2840-1/H·83 定价:28.00元

如发现印装质量问题,影响阅读,请与承印厂联系调换

内 容 提 要

研究汉字可以有多种角度、多种方法。本书的角度是对东汉许慎《说文解字》的众多汉字进行综合的系统的研究,从上古时代的史实、情感、观念以及汉字形、音、义的纷繁联系论证《说文》汉字构成严密的体系,揭示汉字体系的内涵与规律。本书采用的方法是对汉语字词的形、音、义作整体系联的方法,以及对文学、史学、哲学、训诂学作系统贯通的方法。本书继承文字训诂与古代学术研究的根本传统,注重培植学术研究的根基,在当代实行多学科的贯通。书中特辟“21世纪汉字学、训诂学与中华学术研究的思考”一节,对于中华学术文化在新世纪如何发扬蹈厉,以恢廓其全新气象也作了别开生面的论说。

内容の要点

漢字を研究するに当たつて様々な視点と様々な方法がある。本書は東漢時代の「説文」所収の夥しくの漢字を総合的・系統的な研究を行ない、上古時代の史実、情感、觀念及び漢字の形、音、義の複雑な繋がりから「説文」の漢字が厳密な体系を形成したことを論証して、漢字体系の内包と規律を究明しようとする。本書は漢語の字、語彙の形、音、義を一体系と見做して、そのもとに、「説文」に対する文学、史学、哲学、訓詁学的な研究を統一するという方法を取つた。本書は文字訓詁と古代學術研究の根本的な伝統を受け継ぎ、學術研究の基礎をしつかりすることを重んじて、現代の多学科の総合研究を求める。このために本書に特に「21世紀の漢字学、訓詁学と中華學術研究に関する思考」という一節を設け、中華學術文化は新しい世紀に如何に奮発努力して、新しい研究を行なうかについて一生面を開く説を試みた。

ABSTRACT

The study of Chinese characters can be approached from various attitudes and with various methods. This book takes a systematic and comprehensive approach to explore numerous Chinese characters in Shuo Wen Jie Zi in Eastern Han Dynasty so as to describe the rules and structure of Chinese character system, a very strict system that is formed from the intricate relations among the history, emotion, ideology of the early ancient society and the morphology, phonology, semantics of Chinese characters. The major method of this book is to combine the form, sound and meaning of Chinese characters into a holistic system and to join systematically the literature, history, philosophy and interpretative lexicology together. The book continues the basic tradition of ancient academic research and lexical interpretation to cultivate and set up the solid foundation for academic research and interdisciplinary studies. In this book a special chapter "Reflection on Chinese Academic Studies and Chinese Graphetics and Interpretative Lexicology in 21st Century" is devoted to the original discussion about how to develop remarkably the Chinese academic culture to display its new and complete picture.

汉字——永葆青春的文化精灵

(总序)

汉字系统,古老而精深,历久而弥新。它是中华民族的一个伟大创造,是永葆青春的文化精灵。

汉字的诞生,是人类文明史的伟大事件。东汉学者王充论说了汉字的创制是光照日月,功盖天地的宏业:天地为图书,仓颉作文字,业与天地同,指与鬼神合(《论衡·感虚篇》)。

仓颉造字,无须究其有无,汉字的亘古历史,却是确凿的;汉字的魅力,也是公认的。据对出土文物的考证,汉字的出现,大约在距今 6000 年以前。仓颉的神异,汉字的奇妙,如同世界其他许多民族将文字的发生,归诸“神圣类型”一样,是现实事物的非现实反映,是后人对先人创造力的崇拜与解释。可以说,从汉字的初创、确认、使用到逐渐规范

统一,无疑经过了漫长岁月的淘漉,贡献了无数代人的聪明才智。汉字的整个发展过程,就是中华民族智慧的积淀过程。

自从有了汉字,就有了汉字研究。汉字的产生、发展和进步,有赖于一代代中华贤哲和平民对汉字的研究和改进。一部汉字发展史,就是一部汉字研究史。据史籍记载,自周太史籀著《史籀篇》以来,举其大端,秦有李斯《仓颉篇》,汉有史游《急就篇》等蒙学教材,由东汉古文经学家许慎总集大成的《说文解字》确立了汉字研究的学术规范,开启了后来蔚为大观的“许学”研究。考察汉字研究史,可以说至迟发轫于两周,自觉于秦代,兴盛于两汉,中经魏晋、隋唐、宋元,代有继发,余音不绝,及至有清,大家并出,著述斐然,臻于高峰。清季以降,西学东渐,视界更新,尤其是殷商甲骨材料的大批出土,极大地拓宽了学者的视野,文献考据与地下发掘二重印证,汉字研究科学形成新的格局,文字学理论体系得以确立。20世纪末的今天,随着电脑的广泛应用,汉字的信息处理、编码输入,成果不断涌现,多学科的综合研究大放异彩。有识之士甚至预言:21世纪将是汉字的新纪元。

汉字研究史,千百年来呈现鲜明的特色,走过了曲折的历程。

首先,迥然相异于其他文种研究之宗旨的是,历代的汉字研究始终服务于解经济世之用,“小学”与“经学”相联,考据、辞章、义理三者相通。五经无双的许慎高峰特立,《说文解字》辉耀百世。民族智慧哺育了许慎,许慎总结了一个学术时代,也跨越了一个学术时代。《说文解字》成于汉,“说文研究”盛于清。清儒的考据、解经,直让后学叹为观止。

其次,也有别于西方文字学的多元研究机制,历来的汉字研究手段比较单一,方法相对简拙,研究思想亦趋于保

守。一切以解经为目的,以考据为核心,局限于传世文献单一层面的耙梳阐发。汉字研究既离现实日远,复与世界隔绝。乾嘉考据学派尺幅千里的研究境界纵令后学难以企及,亦成了束缚后学的藩篱。守成已属难能,何言发扬弘大。

再次,与西方纯然学术研究大异其趣的,还在于汉字研究几经劫难,命运多舛,艰难曲折。然而它生性顽强,经历肯定、否定、否定之否定的几起几落,依然遵循着自身的发展道路。众所周知,汉字由于字体繁杂,数量庞大,素受“难认、难记、难用”之责。自清末以来,改革之声日渐高涨,学坛巨子、政界显要都喋喋其间,研究淡化了本体,改革难免遭受社会运动的扭曲。举其酿成大潮者,计有四次:切音字运动、国语罗马字运动、拉丁化新文字运动、汉语拼音及汉字简化运动。历次汉字改革运动尽管功不可没,然而偏颇、失误也不容忽视。过激者主张废除汉字,把孩子和脏水一起泼掉;明智者主张革新,却补天乏力,徒兴奈何之叹!因为革命的批判终究代替不了创造的建设,借社会运动断难完成缜密艰巨的科学研究之举。

回顾汉字研究史,我们还发现一个发人深思的事实:有几次机遇曾给这一古老的研究领域带来巨大的激励:一是殷商甲骨文的发现,二是救亡图强、普及教育的潮流,三是历史唯物主义和辩证唯物主义世界观方法论的运用。这几次天赐良机都给汉字研究注入了新的动力,开拓了新的视野。但生命的挣扎和政治的剧变挤扁了学术,机遇一再从手中痛失了。汉字研究终于没有腾飞。历史留下了沉重的课题,留下了巨大的空间。中华民族呼唤着能用新材料、新方法、新视野的一代学人,将汉字研究推向新台阶。

回顾汉字研究史,我们还得到了一个规律性的认识:改革必须抓住机遇,研究必须迎接挑战。经济建设如此,学术建设也莫不如此。要创造,要革新,必须变单向的探幽为多

向的会通，必须变以往孤立的注疏为现代系统的阐发。

当前适逢世纪之交，汉字研究正面临前所未有的机遇。改革开放的时代大潮熔铸了博大与宽舒的学术心态。新一代学人应该也必须在纸上材料、地下材料的二重证据之外，博采人类社会多元文化作参照系，形成考据学的多重证据，多边参照，开辟一条熔铸古今、贯通中西的学术道路。

社会转型、文化嬗变必然要求学术的转型和嬗变。建构21世纪的民族文化，既不要泥古不化，也不能崇洋不悟，更不必趋时媚俗。完全依靠传统文化的简单积累和自然生长，抑或是对外来文化的照单全收和集装箱进口，抑或等而下之甘心沦为商品经济的附庸和奴仆，都只能是鲁迅耻笑过的孱头，都只能徜徉在古人、洋人和孔方兄的阴影下失重、丧格、落伍！正是基于重建一代学人的人品和文品，重现汉字研究的辉煌，从1993年起，我们就酝酿推出一套《汉字研究新视野》丛书。定位于新视野，我们的要求是作者著述的文风要出新，学科研究的学风要出新，民族文化的建构要出新。既不能邯郸学步，也不能食洋不化，更不能清谈高论，空疏无根。我们期待着作者对自身素质、知识结构、思维品格的自我革新，即期望丛书的视界、胸襟要开阔，方法手段、成果结论要与时代、世界对接。总之，要用跨学科、跨时代、跨国界的新视野，进行全新的汉字文化研究。

汉字体系原本是特殊形态的文化思想史料。综观中国学术史，我们不难发现，历代学者苦心孤诣追求的，就是不同层面上审视中国文字体系的文化特质。历史局限了前贤。前贤的得失均垫高了我们脚跟。审视中国传统文化，观念形态的文献，由于传抄走失，尘封附丽，本真日远，比较起来，文字本身所蕴含的文化要素，所铸造的精神空间，所塑造的认知方式，更显得纯粹、著明，更具有原生态的富饶、厚实和个性卓然。只要潜心钻研，我们就会惊异于汉字是

最具生命活力的文字体系,是永葆青春的民族文化根脉。汉字体系的新视野观照,就是从基本的意象单位发掘具有恒久不废的生命力的人文精神元素,原样呈现民族文化心态,这,或许正可称作是一种关于中国学术思想的“单位观念史学”的研究。由此入手,进而还原中国上古史的若干局面,补缀已久湮不知其溯的中国文化观念心性结习之所由发生的社会历史背景;由此入手,既要充分汲取传统考据学的科学实证精神,又要适度借鉴语言学、考古学、人类学等研究成果和科研方法。就方面来说,须穷气尽力,文史哲经,整体贯通;就层次而言,则追求义理、辞章、考据的会通;就整体而论,力求打通古今鸿沟、中西界限,用“世界眼光”进行汉字科学文化阐释。汉字是中华民族的伟大创造,汉字又是人类文明的共同财富。汉字研究应该是跨国界、全人类的文化系统工程。我们不苟同那种所谓“敦煌在中国,敦煌学也应该在中国”的封闭格局和自足心态。我们提倡汉字研究源于中国、走向世界的创造模式和开放心态。这,或许才是根本意义上的人品、文品的升华和现代重塑。

这套《汉字研究新视野》丛书,第一批推出《汉字与书法文化》——书体与字型的文化探寻,《汉字文化综论》——汉字文化研究方法论扫描,《〈说文〉汉字体系与中国上古史》(1999年版改为《〈说文〉汉字体系研究法》)——六千年来汉字真实面目的第一次全方位揭示,《中国文字与儒学思想》——汉字系统与哲学、经学的学术对话。如果条件成熟,第二批要就“汉字心理学研究”、“汉字信息处理系统研究”、“中外(特别是中日)汉字研究之比较”等若干课题,作出跨学科、跨地域的边缘交叉的全新探索。

往昔,假字以证史,援字以考经,这是汉字研究的传统。

今天,入“文”而观“化”,出“文”而入“化”,这是我们对“一个时代自有一个时代的学术范型”的学术史命题的自觉

求解。

我们热切期盼方家的指正,衷心期待读者的支持。
我们将不懈地努力。

李人凡 臧克和

1995年10月南宁—南京

漢字——いつまでも 若さを保つ文化的な精霊

(総まとめのまえがき)

漢字系統がふるい歴史を持つ精しくて深いものであり、長い間たってますます新しい。それは中華民族の偉大な創造で、いつまでも若さを保つ文化的な精霊である。

漢字が生れたことは、人類の文明史上偉大なできごとである。漢字の制定は、太陽と月の光輝のような大業で、蓋世の功績を立てた。東漢の学者王充が次のように論述をした。

天地が図書であり、蒼頡が文字を作る。その業績は天地と同じく。その趣旨は鬼神に合致する。

——「論衡・感虚篇」

蒼頡の字を造ることについては、そのことの有無を

追究しなくてもいい。漢字は確かに歴史が非常に長くて、漢字の魅力も公認されている。出土文物に対する考証によれば、漢字は今から6000年も前に現れたのだろう。蒼頡の不思議も、漢字の奇妙も、世界の多くのその他の民族が文字の発生を「神聖な類型」に帰するように、非現実を以て現実を反映し、後人が先人の創造力に崇拜と解説を物語るものである。漢字の創製、確認、使用から次第に規範と統一に至るまで、もちろん、長たらしい年月を重ねるうちに、淘汰と濾過を経て、無数代の人の聡明と才知がささげられたというべきである。漢字の発展の過程は、中華民族の知恵が積み重なる過程である。

漢字が創制されてから、漢字についての研究も始められたのである。漢字の誕生、発展と進歩は歴代の賢哲と平民の漢字に対する研究と改善に頼るものである。漢字の発展史は、即ち漢字についての研究の歴史である。典籍の記載によると、周代の太史籒が「史籒篇」を書いたから、重要なものは次のようである。秦代に李斯の「蒼頡篇」があり、漢代に史遊の「急就篇」があり、これらのものは児童に啓蒙教育をほどこす私塾の教科書であった。東漢の古文経学家許慎が集大成した「説文解字」が漢字研究の学術規範を確立し、その後盛んな「許学」の研究があった。漢字研究史を考察することは、遅くとも周に始まり、秦代に意識的になり、両漢に盛んになり、魏晋隋唐両宋を経て代代統いて発展して絶えることなく、清代に大家が輩出し、著作がすぐれていて高峰に達した。清末以降、西学が東へ漸進するにつれて、視角が日増しに更新された。とりわけ多くの殷商甲骨文が出土したので、学者の視野が大大的に広められた。文獻にする考証と地下の発掘に二重裏づけられて、漢字を研究する科学が新し局面を形成し、文字学の論理的な体系が確立されたのである、20

世紀末の今日、コンピューターが広く使用されるにつれて、漢字についての情報の処理、コーディングの輸入などが成果をどんどん収めた。有識者の予言によると、21世紀が漢字の新紀元になるだろう。

漢字研究史は、千百年以来はっきりした特色を呈し、曲がりくねった道を経た。

まず、他の文字体系研究と主旨を大いに異にするところは、歴代の漢字研究は始終經書を解釈して世を救うために使われた。「小学」が「經学」とあい連なっていた。「考証」、「辞章」と「義理」が三者で互いに通じ合っていた。許慎が「五經」を研究して、比べるものがなかった、「説文解字」が百代光り輝いていた。民族の知恵が許慎を育て、許慎は一つの學術時代を總括すると同時に一つの學術時代をまたがっていた。「説文解字」は漢代に書かれた。「説文学」は清代に盛んになった、清儒の考証および解經が後の学者を最高のものを見たと感嘆せしめた。

その次、西方の文字学の多元的な研究のメカニズムとも違っている。漢字を研究する手段はむかしから割合に一元的で、方法も相対的に粗末である。研究の思想も保守的傾向がある。すべてが解經を目的とし、考証を核心として、世に伝れる文献に対する単一解明に局限されていた。漢字の研究は日に日に現実からかけはなれて、世界との連絡も断たれていた。「乾嘉考証学派」の尺幅千里的な研究境界が後の学者の企及するところでないけれども、後の学者の束縛にもなった。

三番目、西方の純粋な學術研究と比べてその旨趣を大いに異にするところは、漢字の研究はしばしば災難にあい、道路が曲がりくねっていた。ただし、それは何度も肯定され、否定され、否定の否定された起伏を経つたにも拘らず、依然として自分の発展の道路に沿って進んでき

た。周知の如く、字体が繁雑で、数量も非常に大いから、漢字はいままでずっと「見分けにくいし、覚えにくいし、使いにくい」という非難を受けてきた。清末から、改革の叫び声がひにひに高くなってきた。しかし、学界の巨人や政界の顯要な人がひっきりなしに喋りまくり、研究が改革自身を薄めたから、改革が社会運動によってねじ曲げられた。「切音字運動」、「国語羅馬字運動」、「拉丁化新文字運動」、「漢語拼音及び漢字簡化運動」など、大潮を引き起こす運動が四つあった。度かさなる漢字の改革運動は功積を立てたが、その片手落ちと失策を無視してはいけない。過激主義者は子供をきたない水と共に消滅するように漢字を廃止することを主張し、賢明な者は革新を主張するが、回天の力がなく、徒に如何ともしがないと感嘆した。「革命的な批判は畢竟するところ創意に富む建設に取って代ることができない、社会運動を以て縝密で困難な科学研究をやりとげることとは決して有り得ない。

漢字研究の歴史を顧みるとき、われわれはまた次のような深く考えさせられる事実気づく。この古い研究の領域を大いに激励するチャンスが幾つか現れたことがある。一つは殷商甲骨文の発見であり。今一つは国難を救い、強大を図り、教育を普及する潮流であり、もう一つは歴史的唯物論と弁証法的唯物論の世界観および方法論の応用である。このような千載一遇のよいチャンスはみな漢字の研究に、新しい原動力を注入し、視野をあたらしく広めた。しかし、生きるための腕きや政の激変が純粹な学術研究がじやまし、チャンスが何度もみすみす逸してしまった。だから、漢字の研究はとうとう振興できない。歴史が重い課題を残すと同時に巨大な空間を残してくれた。新しい材料、新しい方法、新しい視野で漢字の研究を新しい階段へ推し進めるように、時代が一代の学者

に呼びかけている。

漢字の研究史を顧みるとき、われわれはまた一つの法則的な認識を得た。改革はどうしてもチャンスをしっかりとつかまなければならない、研究はどうしても挑戦に応じなければならない。経済建設もそうだし、学術建設もそうである。創造しようと思ひ、革新しようと思ふなら、どうしても一方的な探究を多くの方面にわたる融合に変更しなければならない、むかしの孤立する注疏を現代系統の闡明に変更しなければならない。

目前、世紀の交替に巡り会って、漢字の研究は未曾有のチャンスに当面している。改革開放の時代のおおしおが広やかで大様な学術的な気持ちを鑄造した。一代の新しい学者は紙面の文献と出土した材料の「二重証拠」のほかた、人類社会の多元的な文化を広く採集し参考し、考証学の証拠を幾重も形作り、古今を鑄造し東西を貫通する学術的な道路を開拓すべきである。

社会の転換と文化の変遷は必然的に学術の転換と変遷を要求する。21世紀の民族的な文化をつくりあげる時、古典をうのみにして消化不良になってはいけなし、西洋を崇拜し外国にこびてもいけないし、とりわけ流行を逐ひ、俗臭に媚びてはいけなし。一から十まで伝統文化的自然蓄積に頼ったり、コーテナー・シップで輸入する如し外來の文化を凡て受け入れたり、それより下にくだって商品経済の付庸と奴婢にまでおちふれたりするのは、みな魯迅に嘲笑されたような弱者であり、古人と外国人とお金の陰影の下で無重量状態に陥り、人格を失って落伍する。正しく一代の学者の人品と文品を再建し、漢字研究の光り輝きを再現する目的にもとづいて、われわれは1993から「漢字研究新視野叢書」を出版する下相談をした。「新視野」に位置を定めて、我々の要求は著作者が